【Zoom】親鸞上人の言葉を読む　　令和２年８月 14 日（金）

◎親鸞上人［1173-1263］
・1201 年、六角堂で参籠、その後、法然上人を訪ねる。
・1207 年、後鳥羽上皇により、念仏停止。法然上人の弟子４名が死刑。法然・親鸞含む７名が流罪。親鸞上人は越後（新潟県）へ流罪。
・1214 年、関東へ向かう。茨城県（稲田）に長く滞在。
・62,3 歳の頃（1135 年頃）に帰京。
・1256 年、息子の善鸞を義絶。

◎『歎異抄』
●二
　おのおの十余カ国の境（さかい）をこえて、身命をかえりみずして、 たづねきたらしめたまふ御こころざし、ひとへに往生極楽の道を問ひきかんがためなり。
　然るに念仏よりほかに往生の道をも存知し、また法文等をも知りたるらんと、心憎く思し召しおはしまして侍べらんは、大きなる誤なり。もし然らば南都北嶺にも、ゆゆしき学匠たち、多くおはせられて候うなれば、かの人々にも逢いたてまつりて、往生の要よくよくきかるべきなり。
　親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられ参らすべしと、よき人の仰せを蒙（かぶ）りて、信ずる外に別の子細なきなり。
　念仏はまことに浄土に生まるるたね（種）にてやはんべるらん。また地獄に堕つべき業にてやはんべるらん。総じてもて存知せざるなり。
　たとい法然上人にすかされ参らせて、念仏して地獄におちたりとも、更に後悔すべからず候う。
　その故は、自余の行をはげみて仏になるべかりける身が、念仏を申して地獄にも堕ちて候はばこそ、すかされたてまつりてという後悔も候はめ。いづれの行も及び難き身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。
　弥陀の本願まことにおはしまさば、釈尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおはしまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞が申す旨、また空しかるべからず候うか。
　詮ずるところ、愚身が信心におきては、かくの如し。このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、また捨てんとも、面々のおんはからひなり」と云云。

●三
　「善人なおもって往生を遂ぐ。いわんや悪人をや。…
　自力作善の人はひとえに他力をたのむこころ欠けたるあいだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のこころをひるがえして他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生を遂ぐるなり。
　煩悩具足のわれらは、いずれの行にても、生死を離るることあるべからざるを憐れみ給いて、願をおこし給う本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もっとも、往生の正因なり。
　よって、善人だにこそ往生すれ、まして、悪人は」と仰せ候いき。

●五
　親鸞は、父母の孝養（きょうよう）のためとて、一辺にても念仏申したること、いまだそうらわず。

●十三
　わがこころの善くて殺さぬにはあらず。また、害せじと思うとも、百人・千人を殺すこともあるべし。

●十六
　廻心は、日ごろ、本願他力真宗を知らざる人、弥陀の智慧をたまわりて、日ごろのこころにては往生かなうべからずと思いて、もとのこころをひきかえて、本願をたのみ参らするをこそ、廻心とは申し候え。…
　わがはからわざるを自然と申すなり。これ、すなわち、他力にてまします。

●十八
　聖人の常の仰せには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに、親鸞一人がためなりけり。されば、それほどの業を持ちける身にてありけるを、たすけんと思しめしたちける本願のかたじけなさよ。」…
　聖人の仰せには、「善・悪の二つ、総じてもって存知せざるなり。そのゆえは、如来の御こころに善しと思しめすほどに知りとおしたらばこそ、善きを知りたるにてもあらめ、如来の悪しと思しめすほどに知りとおしたらばこし、悪しきを知りたるにてもあらめど、煩悩具足の凡夫。火宅無常の世界は、万の事、みなもって、そら言・たわ言、まことあることなきに、ただ、念仏のみぞまことにておわします」

◎『末燈鈔』（書簡集）
●九
　… 誓願・名号と申してかわりたること候わず。誓願をはなれたる名号も候わず、名号をはなれたる誓願も候わず候う。かく申し候うも、はからいにて候なり。ただ誓願を不思議と信じ、また名号を**不思議と一念信じとなえつるうえは、何条わがはからいをいたすべき。ききわけ、しりわくるなど、わずらわしくは仰せられ候うやらん。これみなひがごとにて候うなり。ただ不思議と信じつるうえは、とかく御はからいあるべからず候う**。往生の業にはわたくしのはからいはあるまじく候うなり。あなかしこあなかしこ。
ただ如来にまかせ参らせおわしますべく候う。あなかしこあなかしこ。
　五月五日　　親鸞
他力には義なきを義とすとは申し候うなり。

●十
　御ふみくわしくうけたまわり候いぬ。さては御法門の御不審に、一念発起信心のとき、無碍の心光に摂護せられ参らせ候ゆえに、つねに浄土の業因決定すとおおせられ候う。これめでたく候う。かくめでたくはおおせ候えども、これみなわたくしの御はからいになりぬとおぼえ候う。ただ不思議と信ぜさせ給い候いぬるうえは、わずらわしきはからいあるべからず候う。

またある人の候うなること、出家のこころおおく［この世を逃れ浄土往生を願うこと］、浄土の業因［＝念仏を唱えること］すくなしと候なるは、こころえがたく候う。出世と候うも、浄土の業因と候うも、みなひとつにて候うなり。すべて、これ、なまじいなる御はからいと存じ候う。仏智不思議と信じさせ給い候いなば、別にわずらわしく、とかくの御はからいあるべからず候う。ただ、ひとびとのとかく申し候わんことをば、御不審あるべからず候う。

ただ、如来の誓願にまかせ参らせ給うべく候う。とかくの御はからいあるべからず候うなり。あなかしこあなかしこ。

五月五日　　親鸞

他力と申し候うは、とかくのはからいなきを申し候うなり。

●十六

… 悪はおもうさまに振舞うべしと仰せられ候うなるこそ、かえすがえすあるべくも候わず。… 凡夫なればとて、**なにごともおもうさまならば**、盗みをもし、人をも殺しなんどすべきかは。もと盗みごころあらん人も、極楽をねがい、念仏を申すほどのことになりなば、**もとひごうたるこころをもおもいなおしてこそあるべきに**、そのしるしもなからん人々に、悪くるしからずということ、ゆめゆめあるべからず候う。…

振舞いはなにとも、こころにまかせよ**といいつると候うらん、あさましきことに候う**。この世のわろきをも捨て、あさましきことをもせざらんこそ、世をいとい、念仏申すことにては候え。…

いつか、わがこころのわろきにまかせて振舞えとは候う。おおかた、経釈をも知らず、如来の御ことをも知らぬ身に、ゆめゆめその沙汰あるべくも候わず。あなかしこあなかしこ。

●十九

としごろ念仏して往生ねがうしるしには、**もとあしかりしわがこころをもおもいかえして**、友・同朋にもねんごろにこころのおわしましあわばこそ、世をいとうしるしにても候わめとこそおぼえ候え。よくよく御心得候うべし。

●二十

煩悩具足の身なればとて、こころにまかせて、**身にも、すまじきことをもゆるし、口にも、言うまじきことをもゆるし、意［こころ］にも、おもうまじきことをもゆるして**、いかにも、こころのままにてあるべし**と申しあうて候うらんこそ、かえすがえす不便におぼえ候え**。酔いもさめぬさきになお酒をすすめ、毒もきえやらぬに、いよいよ毒をすすめんがごとし。薬あり、毒をこのめと候うらんことは、あるべく候わずとぞおぼえ候う。…

はじめて仏の誓いを聞きはじむる人々の、わが身のわろく、こころのわろきをおもい知りて、この身のようにては、なんぞ往生せんずるというひとにこそ、煩悩具足したる身なれば、わがこころの善悪をば沙汰せず、むかえ給うぞとは申し候え。かく聞きてのち、仏を信ぜんとおもうこころふかくなりぬるには、まことにこの身をもいとい、流転せんことをもかなしみて、ふかく誓いをも信じ、阿弥陀仏をもこのみ申しなんどする人は、もとも、こころのままにて悪事をもふるまいなんどせじとおぼしめし

あわせ給わばこそ、世をいとうしるしにても候わめ。また往生の信心は、釈迦・弥陀の御すすめによりておこるとこそみえて候えば、さりとも、まことのこころおこらせ給いなんには、いかがむかしの御こころのままにては候うべき。

◎鈴木大拙『日本的霊性』（昭和 18 年）から。

法然もまた流謫（るたく）の憂き目を受けたが、これがために彼の最後は光あるものになった。彼をして今少しく若からしめたならば、その光彩は一段と増し出たことであろう。…
日本的霊性はまず法然に目覚めて、親鸞に引きつがれたというべきであろう。法然の所説を調べて見ると、なるほど、彼は南北の学匠たちから、迫害をうけ るべきだと思われるふしぶしが大いにある。学文にのみたよって、空疎な概念の世界を守りつづけ、それで「出世」の虚栄を獲得せんとした彼らから見れば、「法然房」のごとく「罪人」であり、「愚鈍第一」であるような人は、自分らの仲間には入れておけぬのである。今日のいわゆる危険人物である。法然及びその一味に対する彼らの迫害はすこぶる合理性をもって居たのである。

霊性的直覚の端的は、実に親鸞の左の句のうちに看取せられる。前掲引文の中に曰う、
「念仏はまことに浄土に生るたねにてや侍べるらん、また地獄におつる業にてや侍べるらん、総じてもて存知せざるなり」と。
また曰く、
「詮ずるところ、愚身が信心におきては、かくのごとし。このうへは、念仏をとりて信じ奉らんとも、また捨てんとも、面々の御計ひなり」と。
これは実に親鸞聖人の真面目を露堂々させて居るといわなくてはならぬ。「物のあわれ」などいって、涙ばかり流して居る平安歌人たちの夢想さえもし能わぬところではないか。聖人は実に霊性的直覚の人である。こんな言葉は概念の世界にのみ生きて居る人々の道破し能わぬところである。ここに鎌倉武士気質の一面が覗われる。「莫妄想！」「霧直向前！」に相通ずるものがある。

法然と室（むろ）の泊（とまり）の遊君との会見は、日本霊性史の上に記録すべき一事である。数百万の人間が生死する戦争も世界霊性史上の事件であるが、而してその量においてわれらを心の底から動著せしめるところのものであるが、質の上から見れば、遊君の宗教意識に触れたものも、亦世界の大事実であらねばならぬ。

真宗は念仏を主とするとか、浄土往生を教えるとか、その外何とかいうというのは、真宗信仰の真髄に触れて居ない。真宗は弥陀の誓願を信ずるというところに、その本拠を持って居る。誓願を信ずるというは、無辺の大慈悲にすがるということである。因果を超越し業報に束縛せられず、すべてそんなものをそっち除けて、働きかけてくる無磯の慈悲の光の中に、この身をなげ入れるということが、真宗の信仰生活であると、自分は信ずる。此土の延長である浄土往生は、あってもよし、なくてもよい。光の中に包まれて居るという自覚があれば、それで足りるのである。

親鸞は罪業からの解脱を説かぬ。すなわち、因果の繋縛からの自由を説かぬ。それはこの存在――現世的・相関的・業苦的存在をそのままにして、弥陀の絶対的本願力のはたらきに一切をまかせるというのである。そうしてここに弥陀なる絶対者と親鸞一人との関係を体認するのである。絶対者の大悲は、善悪是非を超越するのであるから、この方からの小さき思量、小さき善悪の行為などでは、それに到達すべくもないのである。ただこの身の所有と考えられるあらゆるものを、捨てようとも、留保しようとも思わず、自然法爾にして大悲の光被を受けるのである。… 日本的霊性のみが、因果を破壊せず、現世の存在を滅絶せずに、しかも弥陀の光をして一切をそのままに包被せしめたのである。これは日本的霊性にして始めて可能であった。